

はしがき

■編集の趣旨

この《10日で確認 新チェックノート》シリーズは、国語の主要分野について、短期間で集中的に知識の整理・確認をすることを目指して編集しました。

したがって、受験直前における知識の最終確認、少し早めの苦手分野の克服などに使用すると効果的です。

本書はこのシリーズの一冊として、重要な古文単語(連語・慣用句も含む)をまとめました。

■本書の特長

- 1 「古文を読む」「大学入試を解く」ために最も必要な語句およそ二百八十語を厳選して、それを学習日ごとに品詞別・五十音順に配列し、一日分を4ページに収めました。
- 2 上段に見出しとして重要語句を掲げ、下段にはそれに対応する記憶すべき意味を簡潔に記しました。

- 3 中段は問題形式になっているので、各例文の傍線部をきちんと口語訳しながら、語句の意味を定着させてゆきましょう。
- 4 毎日の終わりに【発展演習】として、最近の入試問題を採録してあります。理解度の確認と仕上げのために挑戦しましょう。
- 5 巻末に、チェック用としても使える「語句索引」(見出し語すべてを五十音順に配列)を用意しました。
- 6 別冊解答書には、【解答】のほかに、【解説】と例文すべての【口語訳】とを付けました。有効に利用してください。

本書によって、古文単語の知識が確実に身に付くことを期待しています。

編著者

《目次》

第1日	名詞	4
第2日	形容詞(1)	8
第3日	形容詞(2)	12
第4日	形容詞(3)	16
第5日	形容動詞	20
第6日	動詞(1)	24
第7日	動詞(2)	28
第8日	敬語動詞	32
第9日	副詞	36
第10日	連語・慣用句	40
語句索引		44

名 詞

問 傍線部を口語訳せよ。

- ① あそび 月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞし給ふなる。
(源氏)
- ② あらまし かねてのあらまし、みな違ひゆくかと思ふに
(徒然)
- ③ いそぎ ところ狭き御いそぎの勢ひなり。
(源氏)
- ④ うつつ うつつにも夢にも人にあはぬなりけり
(伊勢)
- ⑤ おほえ これより歌詠みの世に覚え出で来にけり。
(十訓抄)
- ⑥ おほやけ いみじく静かに公に御文奉り給ふ。
(竹取)
- ⑦ かけ 渡る日の影も隠らひ 照る月の光も見えず
(万葉)
- ⑧ かたち この児のかたちのきよらなること世になく
(竹取)
- ↑① 管弦の遊び。② 狩り・行楽などの楽しみ。
- ↑① 予期。願望。② 計画。心づもり。
- ↑① 急用。② 準備。用意。
- ↑① 現実(夢に対し)。② 正気。
- ↑① 評判。世評。人望。② (多く「御」を伴い)寵愛。
- ↑① 皇居。宮中。② 天皇。③ 朝廷。
- ↑① 光。② 水や鏡などに映る姿やかたち。③ 面影。
- ↑① 外形。姿。② 容貌。器量。顔かたち。

- ⑨ けしき このもとの女、あしと思へるけしきもなく
(伊勢)
- ⑩ けはひ (車を) 門引き入るるよりけはひあはれなり。
(源氏)
- ⑪ こことわり 常住ならんことを思ひて、変化のこことわりを知らねばなり。
(徒然)
- ⑫ ざえ 右大臣は、才世にすぐれ、めでたくおはしまし
(大鏡)
- ⑬ しな 興なきことを言ひても笑ふにぞ、品のほど計られ
(徒然)
- ⑭ しるし なべてならぬ法ども行はるれど、さらにそのしるしなし。
(方丈)
- ⑮ せうそく 心に忘れずながら消息などもせで
(源氏)
- ⑯ ちぎり 前の世にも、御ちぎりや深かりけむ
(源氏)
- ⑰ ついで 四季はなほ定まれるついでであり。
(徒然)
- ⑱ つとめて 冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。
(枕)
- ↑① ようす。ありさま。情景。
- ↑② 様子。態度。表情。機嫌。
- ↑① 雰囲気。ようす。② そぶり。態度。品格。③ 名残。
- ↑① 道理。筋道。② 判定。判断。③ 理由。説明。
- ↑① 学問。教養。特に漢詩文の学識。② 芸能。技芸。
- ↑① 身分。家柄。② 品性。品格。③ 種類。区別。
- ↑① 靈験。ご利益。② ききめ。③ 証拠。目印。④ 前ぶれ。
- ↑① 手紙。便り。伝言。② 来意を告げる。訪問。
- ↑① 約束。男女関係。② 前世からの因縁。宿縁。
- ↑① 物事の順序。② 機会。おり。
- ↑① 早朝。② 翌朝。翌朝早く。

- ① 手のあしきよき、歌の折に合はざらむも知らじ。(枕)
- ② 年ごろ遊びなれつる所をあらはにこぼち散らして(更級)
- ③ 花びらの端にをかしき匂ひこそ、心もとなうつきためれ。(枕)
- ④ いかでなほ少しひがこと見つけてをやまむ。(枕)
- ⑤ 声は幼げにて文読みたる、いとうつくし。(枕)
- ⑥ 神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。(徒然)
- ⑦ 入道、今日の御まうけいといかめしうつかうまつれり。(源氏)
- ⑧ 落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。(源氏)
- ⑨ 母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて(源氏)
- ⑩ (女は)世の中を憂しと思ひて、いでて去なむと思ひて(伊勢)

- ↑①筆跡。文字。②楽器の奏法。③技量。④手段。⑤手傷。
- ↑①長年。數年来。②年格好。年配。
- ↑①色つや。②つややかな美しさ。気品。③榮華。④余情。
- ↑①まちがい。あやまり。②道理にはずれたこと。
- ↑①書物。文書。②手紙。③學問。漢学。④漢詩。
- ↑①本来の志。前からの望み。②本当の意味。真意。
- ↑①準備。用意。②ごちそうの用意。もてなし。
- ↑①理由。わけ。②由緒。よい家柄。③趣。風情。
- ↑①由緒。いわれ。②理由。わけ。③方法。手段。④情趣。
- ↑①現世。世間。②男女間の情。男女の仲。夫婦の仲。

発展演習 1

まだ夜を込めて都を出づ。有り明けの月の影、東川の浪に映りて、鳴き渡る鳥の声、遠里の跡に聞こえて、そこはかたなく霞渡れる空のけしき、いとおもしろし。(都のつと)

問 傍線部の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 真夜中の空に浮かんでいる月の陰
- イ 真夜中の空に浮かんでいる月の姿
- ウ 夜明けの空に上ってきた月の光
- エ 夜明けの空に残っている月の光

発展演習 2

1 正元元年三月五日、西園寺の花ざかりに、大宮院、一切経供養せさせ給ふ。年ごろ思しておきてけるをも、いたくしろしめさぬに、女の御願にて、いとかしこく、ありがたき御事なれば、院もおなじ御心にわたちの給ふ。(増鏡)

2 ある夜、春のまうけに、いつくしききぬをたち縫ひてありけるが、夜いたくふけにたれば、家子どもはみなゆるしつ、ねぶらせたり。(新花摘)

3 姫君言ふやう、「^①恐びて文など通はさむに、^②手書かざらむ、^③口惜し。手習ふべし」。

童喜びて、一二日に習ひ取りつ。(古本説話集)

問 傍線部①～③を、それぞれ現代語訳せよ。

発展演習 2

① 古文で「影」の意味を問われたら、光の意であることが圧倒的に多い。

「有り明け」(表記は「有明」とも)も重要古語。夜が明けかけてもまだ月が空に残っているころ。またその月。陰暦十六日以後だが、特に二十日過ぎをいう。

2

①の「年ごろ」は基本。「思しておきて」は「思ひおきて」の尊敬語。

②の「まうけ」も基本。

③の「文」「手」を的確に訳す。なお、傍線部中の二つの「む」は、前者は婉曲、後者は仮定の助動詞として処理する。